

論文

——シンポジウム「芸術のための芸術／世界のための芸術——開かれた唯美主義の形態」

唯美主義運動の「大義」——ウォルター・ハミルトン著 『英国の唯美主義運動』(1882年)をめぐる

川端 康雄

はじめに

ウォルター・ハミルトン (Walter Hamilton, 1844-99) の『英国の唯美主義運動』(Walter Hamilton, *The Aesthetic Movement in England*) は、唯美主義運動が続行中であった1882年に刊行された先駆的な著作として研究史的な意義がある。その記述にはある種のスノビズムと凡庸さがあり、それが同書を名著とするのを妨げているのだが、諸芸術の総合(への志向)を同運動の肝と捉えて唯美派の仕事を一般読者に向けて解き明かした功績は大きい。本稿では、刊行当時の文脈を押さえつつ、本書の再評価を試みたい。本書のエピグラフにウィリアム・モリスの講演の「大義」をめぐる一節を掲げている点は、「開かれた唯美主義」の考察のヒントとなるだろう。筆者は勤務先の同僚、研究生数人とこれをテキストにして読書会をおこない、日本語訳と注釈をほどこして大学紀要に分載する作業を継続している。本稿はその中間報告の意味合いもある。

まずは常套手段を用いて、キーワードを『オクスフォード英語辞典』(OED オンライン版)で見えておくと、語句検索をしたかぎりでは“Aesthetic Movement”という句はこのハミルトンの書名がこの辞書での文献初出で、それ以前の用例は見られない。形容詞“aesthetic”のOEDの定義は、1として「五感による知覚の／に関わる(廃れた語義)」(Of or relating to perception by the senses; received by the senses. *Obsolete*)で文献初出は1798年、2として「美的なものの知覚、観照、批評の／に関わる、五感によって受容された」(Of or relating to the perception, appreciation, or criticism of that which is beautiful)で文献初出は1812年、3として、「『芸術のため

の芸術」の教義を唱道する運動を指示する／運動の／運動に関わる。特に英国19世紀後半における芸術家と著述家の一派に属する者、いまは歴史的〔語義〕」(Designating, of, or relating to a movement advocating a doctrine of 'art for art's sake', *spec.* any one of a school of artists and writers in England in the late 19th cent. Now *historical*)とあり、その文献初出は1830年となっているが、1882年の用例としてハミルトンの本から「詩の唯美派の指導者たちは、情熱を官能的に示唆する描写を喜ぶというので、肉感派詩人と命名されている」(The leaders of the Aesthetic School in poetry have been styled fleshly poets, delighting in somewhat sensually-suggestive descriptions of the passions)という一文が引かれている。なお、その用例の前にウォルター・ペイター(Walter Pater, 1839-94)の1868年の用例として、「『唯美的な』詩はギリシアや中世の詩の単なる複製でもなければ、単なる近代の生活と感情の理想化でもない」(The 'aesthetic' poetry is neither a mere reproduction of Greek or medieval poetry, nor only an idealisation of modern life and sentiment)の一文を『観照批評集』(*Appreciations*, 1889)所収の「唯美的な詩」(Aesthetic Poetry)からとして挙げているが、正確を期するなら1868年の初出(ウィリアム・モリスの初期の3つの詩集を取り上げた匿名の書評)では“The ‘aesthetic’ poetry”でなく“This poetry”(つまりモリスの詩)となっていたので([Pater] 311)、これを“aesthetic”の1868年の用例とするのは不適切と思われる。

関連語として“aestheticism”(唯美主義)についてOEDに当たると、「美的であることの性質。美しいもの、五感にとって魅力的なものの追求／への献身、とりわけ道徳や理性に基づく外観に対立するものとして。特に唯美主義運動への支持」(The quality of being aesthetic; the pursuit of, or devotion to, what is beautiful or attractive to the senses, *esp.* as opposed to an ethically or rationally based outlook; *spec.* adherence to the Aesthetic Movement)と説明され、文献初出は1840年、それはドイツの神学的な美学を説明した文章から引かれている。そのうえで、1882年のハミルトンの当該書から「唯美主義がその美の全貌において最高のかたちで見られるのはライシーアム劇場においてである」(It is at the Lyceum Theatre that aestheticism in all its beauty can best be seen)という一文が使われている。

1 先駆的な唯美主義運動史としての評価

OEDで「唯美的」「唯美主義(運動)」の初期の用例としてハミルトンの著作が挙げられているのを確認したところで、関連の先行研究で本書がどのように言及されているかをつぎに見ておきたい。

過去30年の書籍のなかでは、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の学芸員であったライオネル・ランボーン(Lionel Lambourne, 1933-2010)が1996年刊行の単著『唯美主義運動』でハミルトンを「唯美主義運動の最初の歴史家」(the first historian of the Aesthetic Movement) (24)と規定し、「[[唯美主義]運動の初期の歴史家であり熱烈な支持者(条件付きだが)であるウォルター・ハミルトンは[……]1882年にこの主題についての最初の本を『英国の唯美主義運動』と題して刊行した」(119)と述べている。「諷刺と唯美主義」を扱った章のなかでランボーンは、ハミルトンがジョージ・デュ・モーリエ(George Du Maurier, 1834-96)の一連の風刺漫画を『ペイシャンス』(*Patience*)の直接の発想源であるとしている点について、ウォルター・クレイン(Walter Crane, 1845-1915)がW・S・ギルバート(1836-1911)に働きかけた事実を紹介し、修正を加えている(124)。エリザベス・プレッティジョン(Elizabeth Prettejohn, 1961-)は2007年刊行の『芸術のための芸術——ヴィクトリア朝絵画における唯美主義』のなかで、「オスカー・ワイルドが北米講演旅行で「英国の芸術ルネサンス」の講演をおこない、ジャーナリストのウォルター・ハミルトンが一般向けの解説として『英国の唯美主義運動』を刊行した1882年までには、その運動はファッショナブルな悪名を馳せるようになっていた」(7)とハミルトンの本にふれている。さらに2011年から12年にかけてロンドン(ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館)、サンフランシスコ(ド・ヤング博物館)、パリ(オルセー美術館)を巡回した唯美主義運動の回顧展(「美の崇拜——唯美主義運動1860-1900」展)の充実した図録のなかで、編者のひとりスティーヴン・キャロウェイ(Stephen Calloway)は、「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティが没し、オスカー・ワイルドが大いに宣伝された北米講演旅行に出かけて唯美主義の福音を説き、名を馳せていた1882年に、ウォルター・ハミルトンは『英国の唯美主義運動』を出版した。この主題について本格的かつ広範に扱った最初の本であるこの先駆的な著作のなかで、ハミルトンは彼の見たところでの唯美主義の知

的基盤と、そのより直接的な芸術上の現れの両方を解き明かし、美術、詩、建築、室内装飾をひとつの大きな全体の関連し合う諸側面として示すという見事な試みをおこなった」(13)と評価している。

日本では昭和初期に英文学者の本間久雄(1886-1981)がこの主題での先駆的な著作『英國近世唯美主義の研究』(1934)において、唯美主義運動の1880年代初めまでの系譜をたどるのにハミルトンに多くを負っている。じっさい、本間の見解では、英国の唯美主義運動を「それ自らとして、研究の対象としたものは、極めて少な」くて、「少くも纏つた書物の形で刊行されたもの」としては、ハミルトンの本しか見当たらなかった。ハミルトンの本は「唯美派運動の理論的根拠の説明には欠けてはゐるが、その当時の材料をひろく、ジャーナリズムの上から蒐集したもので、一種の社会的現象としてこの運動を知るには、屈強な、そして唯一の文献である」(445)と評価している。

2 著者ハミルトンについて

著者のウォルター・ハミルトンについては、『オクスフォード国民伝記事典』(*The Oxford Dictionary of National Biography*)には記載がなく、他に伝記の類も見当たらず、詳細が不明なのであるが、本書のタイトルページの著者名の下に「王立地理学協会および王立歴史学協会フェロー。『英国の桂冠詩人たち』、『国歌・愛国歌の歴史』、『ジョージ・クルックシャンクの思い出』ほかの著者」(Fellow of the Royal Geographical and Royal Historical Societies; Author of “The Poets Laureate of England,” “A History of National Anthems and Patriotic Songs,” “A Memoir of George Cruikshank,” &c.)と紹介されている。ブリティッシュ・ライブラリーのカタログで検索した情報を加えると、『英国の唯美主義運動』以外の主要著作(編著をふくむ)と刊行年は以下になる。

A Memoir: George Cruikshank Artist and Humourist (1878)

The Poets Laureate of England. Being a History of the Office of Poet Laureate, Biographical Notices of Its Holders, and a Collection of the Satires, Epigrams and Lampoons Directed against Them (1879)

The Origin of the Office of Poet Laureate (1879)

A Sketch of the Drama in England during the Last Three Centuries (1890)

French Book-Plates: A Handbook for Ex-Libris Collectors (1892)

Parodies of the Works of English and American Authors. 6 vols. (London, 1884-89)

Dated Book-plates (Ex libris) with a Treatise on Their Origin and Development (1895)

このリストを見ると、愛書家で書誌学的な関心が深いこと、またパロディ、諷刺、カリカチュアへの興味も伺える。後者の特徴は、後述するように、『英国の唯美主義運動』の記述のなかで、『大佐』(Colonel)や『パイシャンス』への言及や、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) を騙った偽書簡の引用などに現れている。なお、リストの最後の著作のタイトルページには著者について「蔵書票協会会長」(Chairman of the Ex Libris Society) および「フランス蔵書票蒐集協会副会長」(Vice-President of the Société Française des Collectionneurs d'Ex-Libris) の肩書きが記されている。書物研究者の気谷誠 (1953-2005) によれば、「19世紀後半には、フランスに続いてイギリスでも蔵書票が流行し、1891年にはロンドンで蔵書票協会が創立された。[...]ハミルトンは、ロンドンの蔵書票協会の主要な会員であり、『フランスの蔵書票』(1892年初版、1896年改訂増補版)や『年代別蔵書票』(1895年)といった本を著し、蔵書票研究に一役買った。とりわけ前者はフランスの蔵書票について簡便に紹介した好著として、1975年にはアムステルダムで復刻版が出版されている」(「ハミルトンの蔵書票」) のことで、蔵書票の研究においてもハミルトンが重要な仕事を残していたことがわかる。

3 『英国の唯美主義運動』の構成

『英国の唯美主義運動』の目次は以下のようになっている。

[序章]

- (1) ラファエル前派
- (2) 『ジャーム』
- (3) ジョン・ラスキン

- (4) グローヴナー・ギャラリー
 - (5) 唯美主義文化
 - (6) 唯美派詩人——ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ／ブキャナンによるロセッティ攻撃／ウィリアム・マイケル・ロセッティ／トマス・ウルナー／ウィリアム・モリス／アルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン／アーサー・W・E・オショナーネシー
 - (7) 『ジョナス・フィッシャー——茶色と白の詩』とロバート・ブキャナン氏
 - (8) 『パンチ』による唯美派攻撃
 - (9) オスカー・ワイルド氏
 - (10) 唯美主義者のための家
- 結論

序章では本書の刊行の前年に初公演がなされヒットした喜歌劇『ペイシャンス』と喜劇『大佐』を導入とし、それら2作品、そして『パンチ』誌のデュ・モリエールによる風刺画が嘲笑の種にしている「唯美派」について、擁護の姿勢をまず鮮明に打ち出している。「この一派には実体はなくデュ・モリエール氏の頭のなかにあるだけだとか、仮にあるとしても単に無名の人びとの取るに足らぬ徒党であって、自分自身や自分のつまらない作品が注目を浴びて虚栄心を満たしたのだ、などという厭味を言われてきた。だが、この一派が存在してきたのは確かなのであり、その指導者たちは長く大衆の趣味教育にあたってきた名士である」(vii)。

こうした、まさに同時代に進行中の唯美主義論争にふれたあとで、本論に入ると、30年以上前にさかのぼり、ラファエル前派の活動を論じる。唯美主義運動を語り起こすのに1848年結成の同派から始めるというひとつの型が(少なくとも単行本としては)本書によって定められ、確立したといえるのかもしれない。ホルマン・ハント(Holman Hunt, 1827-1910)、ジョン・エヴェレット・ミレイ(John Everett Millais, 1829-96)、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ(Dante Gabriel Rossetti, 1828-82)らを中心とする「天賦の偉大な独創性と非凡な勤勉さを併せ持った」若者たちは、「当時の英国で慣習的におこなわれていた詩芸術、絵画芸術、彫刻芸術に革命を

もたらそう」という「大胆な計画」を立てた(1)。ラスキンのラファエル前派擁護の内容を語り、創立メンバー7名のその後の展開を略述したあと、ロイヤル・アカデミーで地歩を築いたミレイとトマス・ウルナー(Thomas Woolner, 1825-1892)、そしてハントの3人については、唯美主義運動の一員と見なすことはできないとする一方で、ロセッティを運動の当事者として位置づけている。本書の執筆時点ではロセッティの絵画作品は、ほとんど一般の目にふれることがなくなっていたため、画家というよりは詩人として広く認知されている(ただし彼は本書刊行と同年の1882年4月に死去、1882年から83年にかけての冬季にロイヤル・アカデミーにて回顧展が開かれた)。だが「この人物のなかに諸芸術のさまざまな働きがひとつに融合されているさまを見ることができる。この融合によってこそ、最高度に発展したし真の唯美主義者が形作られると考えられるのである。じっさいロセッティは、諸芸術の相互連関をいちばんの拠り所とするひとつの流派の筆頭に位置する人物であるとみなすべきである」(5)。絵画芸術、彫刻芸術、さらに本書の射程からすると装飾芸術、建築芸術もふくむ諸芸術の総合が唯美主義運動の理念の根幹をなすことがここでも指摘されている。画家にして詩人であるロセッティは、それぞれのジャンルにおいてのみならず、絵画作品に自作のソネットを刻むという身ぶりによっても、そうした諸芸術の総合化を図ったこと、それが評価されているわけである。

ジョン・ラスキンの仕事については、最初の2章でラファエル前派の擁護者としての貢献について、引用をまじえてかなり詳しく紹介したうえで、第3章で改めてひとつの独立した章を立てて論じている。ただしラスキンを真正面から論じるというのではなく、「ラスキン対ホイッスラー」裁判を中心的な話題としている。この章は冒頭部分と終わり近くでそれぞれラスキンのパロディを長々と引用している点で風変わりである。初めはラスキンを騙った偽手紙(チェスターフィールドの美術学校からの講演依頼の断り状)、最後はマーク・トウェインのヨーロッパ紀行文に含まれるラスキンの文体模写の一文である。先に見たように、ハミルトンには編著として『英米作家の作品のパロディ集』というのがあり、自身のパロディ、パステーションという表現形式への嗜好がこの章のトーンと関わるものであるように思われる。

グローヴナー・ギャラリーの第1回展覧会に《黒と金のノクターン——落下する花火》(*Nocturne in Black and Gold: The Falling Rocket*, 1875)を出品したホイッスラー (James Abbott McNeill Whistler, 1834-1903) をラスキンが「公衆の面前で絵具壺をおちまけることで二百ギニーを請求する痴れ者」(Ruskin, *Works*, vol. 29, 160) と罵倒したことに端を発する裁判は1878年で、ハミルトンの本が出る4年前のことだった。公判の模様を紹介しつつホイッスラーのパンフレット『芸術と芸術批評家』を用いて、ラスキンおよび美術批評家全般を断罪するホイッスラーの言い分に一定の理解を示しているものの、ハミルトンのホイッスラー評価は極めて低く、この画家を英国の唯美主義運動の本流から外れた傍流として扱っている。その後のホイッスラー評価を思い合わせるとこの過小評価は特異なものと映る。それは単にハミルトンがホイッスラー作品の真価を理解できなかったためかもしれない。あるいは英国的唯美主義を「ナショナル」な運動としてとらえようとするハミルトンの史観からして、ホイッスラーは排除すべき外国人とみなしていたということなのかもしれない。

なお、本書でラスキンが頻出するのと対照的に、ウォルター・ペイターの名前が一度も出てこない。本書ではオスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) が運動の中心人物として扱われているので、ラスキンと同程度にペイターにも注目してよかったはずだが、1882年の時点でハミルトンはペイターの存在を重視していなかったことがうかがわれる。

4 オスカー・ワイルド

本書の全編についてこの調子で内容紹介とコメントをする紙幅はないので、あとは第9章「オスカー・ワイルド氏」と最終章「唯美主義者のための家」についてふれるにとどめておく。

ワイルドについては、第三版の前書きで「ワイルド卿夫人からは目下本国と米国の双方でかなりの好奇的となっているご子息オスカー・ワイルド氏についてご教示いただいたおかげで、本書で氏の経歴を細大漏らさず記述することができた」(iii) と謝辞を述べている。補足すると、本書の刊行時の1882年にワイルドは招かれてアメリカおよびカナダの諸都市を講演のため巡回していた。ワイルドの母親ジェイン・フランチャスカ・アグネ

ス・ワイルド (Jane Francesca Agnes Wilde, 1821-96) は詩人として「スペランザ」(Speranza) の筆名で発表し、またアイルランド民族運動に積極的に関わった。意気盛んな彼女から直に情報が得られたということで、ワイルド自身はもとより、両親の経歴もかなり詳しく述べられている。ただし、年齢を1846年生まれの26歳と記しており(実際は1844年生まれの28歳)、ワイルドの年齢詐称を母親は訂正しなかったように見受けられる(97)。

アメリカ講演の最中であったが、英国の新聞でもそれが伝えられており、ハミルトンは米国でのワイルドの言動と米国人の評判についてかなり詳しく紹介している。また「英国における芸術ルネサンス」(The English Renaissance of Art) などの講演の内容にも踏み込んでいる。作家ワイルドのキャリアとしてはまだ初期にあたり、1881年に刊行した『詩集』からかなり多く引用してその唯美主義の特徴を論じている。そのなかで最長の詩である「幸あれ、女帝よ」(Ave Imperatrix) を取り上げて、そこにはワイルド自身が「ひとりの共和主義者」(a Republican) であることを示す考えが表明されていると指摘する。その共和主義は「騒々しく派手なものではなく、静かで忍耐強い類のものであり、民主主義が広く行きわたって民衆が統治権を掌握することによって、彼等が欲する変化を平和裡にもたらし、現体制の悪弊を除去するまで待つことで満足しているようなもの」(105) である。ワイルドが後に「社会主義下の人間の魂」(The Soul of Man under Socialism, 1891) で展開するラディカルな側面の萌芽とも呼ぶべき特質をハミルトンはここで捕捉しているように思う。「社会に開かれた唯美主義」という問題がここで提起されていると見てもよいだろう。

5 「唯美主義者のための家」、モリスの芸術論

これと関連してくるのが、唯美主義とアーツ・アンド・クラフツ運動との重なり合いについてである。第10章「唯美主義者のための家」はロンドン西郊のベッドフォード・パーク (Bedford Park) をハミルトンが訪問した一種の同時代的ルポルタージュとなっている。

ベッドフォード・パークは1870年代半ばから80年代にかけて不動産開発業者のジョナサン・カー (Johathan Carr, 1845-1915) が中心となって計画を進めた住宅街で、ボーンヴィルやポート・サンライト、あるいはハムス

テッド・ガーデン・サバーブに先んじる最初のガーデン・サバーブであった。カーはグローヴナー・ギャラリー館長であったカミンズ・カー (Comyns Carr, 1849-1916) の実兄で、唯美主義的な趣味を兄弟で共有していた。ベッドフォード・パークはおよそ500棟の戸建て住宅に加え、学校、教会、クラブハウス、店舗、宿屋(タバード亭)がアン女王様式で建てられた。カーが地所に多く植わっていた榆の巨木を伐採せずに残すように努め、緑の景観を大事に考えた点は、後続のエベネザー・ハワード (Ebenezer Howard, 1850-1920) らのガーデン・シティ建設を先取りしており、時代に先んじた見方であった (Lambourne 86)。何人かの建築家がここを手がけたなかで、最重要なのがリチャード・ノーマン・ショー (Richard Norman Shaw, 1831-1912) であった。

「唯美派についてのわれわれの本は、ベッドフォード・パーク住宅群について書かれなければ決して完成とは言えないだろう」(125) と友人に言われたハミルトンは、ロンドン中心部から30分鉄道にのり、ターナム・グリーン駅に向かった。駅から数分で目的地に到着。まずタバード亭に赴き、そこで昼食かたがた、マネージャーの説明を受けながらインテリアを吟味する。次にクラブハウスを訪ね、それから一般住宅に向かう。

新しい家の室内装飾については、ベッドフォード・パークの入居者は自由にいろいろなものを選んでよい。居住者の多くはウィリアム・モリス氏による壁紙とデザインを選んできた。ブルームズベリーにある氏の商会は品揃えが豊富で、多様な新作パターンを生産しているので、この住宅地のなかでひとつの家から別の家へと移っても単調で似たり寄ったりになる心配がない。それにいろいろな趣向で変化をつけることがじつに簡単にできる。デイドー〔腰羽目〕の紙、タイル、あるいはマット、壁紙、ディステンパー〔水性塗料〕、壁掛け、タペストリーなどを選択できるので、この新しい装飾様式においては単調さの危険を避けられるのである。(133)

この時点でベッドフォード・パークは入居者を受け入れて5~6年しかたっていないかった。この訪問記は町並みの統一感とそれぞれの家屋の個性が両

立していることを伝え、またモリス商会のデザインが重宝されたことも強調している。

そして「唯美主義者のための家」の章の最終頁はモリスの装飾芸術論から引用されている。芸術への理解がない富裕層に真の装飾芸術の復興をまかせても無駄だと述べているくだりである。

こうした連中は芸術の実際面を知るに足るほど芸術に時間を費やす機会がないものだから、自分自身の利益になるように流行をあちこちへと押し出すために時間を費やす手合いの言いなりにどうしてもなってしまうのです。

よろしいでしょうか、そうした手合いからは、あるいはそうした手合いに導かれてしまう連中からはなんの助けも得られません。装飾芸術への唯一の真の助けは装飾芸術の仕事にたずさわっている人たちからもたらされるはずです。そしてそういう人びとは指図を受けるのではなく、みずから率先してやらねばならないのです。

芸術作品であるべきものをみずからの手で作るみなさんは、世間の人びとがそうしたものに本当に関心をもてるようになる前に、全員が芸術家、それも良い芸術家とならなければなりません。そうなればきっとみなさんが流行を先導することになるでしょう。流行のほうがみなさんの手にごく従順にしたがってくるでしょう。〔…〕

世の中には数多のまがい物がある。それらは買い手に有害で、売り手にはいっそう有害で、さらに作り手にとっては——本人にその自覚がありさえしたら——もっとも有害なものです。もしもわれわれ職人が万事においてすぐれた出来栄えのものしか作らないと決心するならば、良質の〈装飾芸術〉、すなわち装飾の技量をみがくことにむけて、それはなんといいよき基礎となることでしょうか。ところが現状では、非常に低い水準で仕事をするのがあまりにも多く、しかもその低い水準にも達しないという場合もよくあるのです。(Qtd. in Hamilton, *The Aesthetic Movement* 136; Morris, “The Lesser Arts” 16-17, 29)

この出典はモリスの1882年2月に刊行された第一講演集『芸術への希望と不安』(*Hopes and Fears for Art*)に収められた講演「レッサー・アーツ」(*The Lesser Arts*)である。これは当初「装飾芸術」(*The Decorative Arts*)と題して1877年12月にロンドンでおこなったトレイズ・ギルド・オヴ・ラーニング(*the Trades Guild of Learning*)主催の講演であった。モリスにとってはこれが生涯で最初の公的な場での講演であった。トレイズ・ギルド・オヴ・ラーニングはロンドンの職工(*operative*)たちの成人教育促進の場として1873年に社会改良家で聖職者のヘンリー・ソリー(*Henry Solly*, 1813-1901)や古典学者で実証主義者のG・C・W・ウォー(*George Charles Winter Warr* (1845-1901)らによって結成された。モリスもこの組織を支援し、評議員を務めている。上記引用で「みなさん」と呼びかけている聴衆がそうした職工たち(「芸術作品であるべきものをみずからの手で作るみなさん」)であることに注意したい。ハミルトンは『英国の唯美主義運動』を執筆中であった時期に折よく出されたモリスの講演集を本文に組み入れたのであることがわかる。

おわりに——モリスのエピグラフの含意

モリスの講演は本書の表紙エピグラフにも使われている。これを最後に考察しておきたい。以下の文言である。「いままでに多くの大義がどのような経過をたどってきたかをお聞き及びではないでしょうか。最初はそれを主張しても注意を払う者はほとんどいない。つぎに大半がそれを非難する。だが最後には万人がそれを受け入れる——そうしてその大義は勝ち取られるのです」(*Morris, "Making the Best of It" 168*)。これもロンドンのトレイズ・ギルド・オヴ・ラーニング主催で1880年11月におこなった講演がもとになっている。この「大義」(*the cause*)というのが、ひとつの芸術運動の大義、すなわち万人が(「まがい物」でない)芸術をわかちあえるようにしようという呼びかけであることはこのエピグラフの前段と併せて見れば明らかである。

[...]われわれには、生の喜びを浪費するあの奴隷状態に反逆する権利と義務の両方があるのではないのでしょうか。けっしてみずからのせ

いではないにせよ、ものを考えず、喜びももたない人びとは、世界をそうした奴隷状態のなかに包み込んでしまったのです。この反乱には勝利が望めるとわれわれは本心から言うことができます。われわれのくらしのなかには、それで満ち足りるのではなく、もっと多くをもちたいと希求させるのに十分な芸術が存在しているからです。その願いに促されてわれわれは芸術と、芸術への渴望を広めてゆこうと務めるのです。自分たちでそう願うなら、われわれが味方に引き入れる人びともおなじようになります。十分に望めることですが、少しずつその反逆は功を奏し、ついには大多数の人びとがある程度の芸術をもてるようになります。それを得て初めて彼らは、いかに自分たちには芸術が少ないかを思い知り、また万人が当然の権利として芸術を分かち合えたなら——つまり公平な機会が与えられて自分に要るだけの芸術を手にできたら——いかに自分たちのくらしを向上させてゆけるかを実感することになるでしょう。

これはほんとうに荒唐無稽な希望でしょうか。いままでに多くの大義がどのような経過をたどってきたかをお聞き及びではないでしょうか。最初はそれを主張しても注意を払う者はほとんどいない。つぎに大半がそれを非難する。だが最後には万人がそれを受け入れる——そうしてその大義は勝ち取られるのです。(Morris, “Making the Best of It” 168)

これをエピグラフに選んだことから考えるならば、ハミルトンは唯美主義運動を少数の卓越した詩人や画家たちの営為として狭くとらえるのではなく、モリスに共感して芸術の民主化という広い「大義」掲げて、一般に向けて運動の経緯と現状を綴ったと見ることができるだろう。ハミルトンのこの著作のなかに「開かれた唯美主義」の可能性が示されているのである。

*本稿は、日本ヴィクトリア朝研究学会第20回大会(2020年11月18日、オンライン開催)のシンポジウム「芸術のための芸術／世界のための芸術——開かれた唯美主義の形態」で読んだ原稿に大幅な加除修正をほどこしたものである。

使用文献

- Calloway, Stephen. "The Search for a New Beauty." Stephen Calloway and Lynn Federle Orr, editors. *The Cult of Beauty: The Aesthetic Movement 1860-1900*. V&A Publishing, pp. 11-23.
- Hamilton, Walter. *The Aesthetic Movement in England*. 3rd ed. Reeves & Turner, 1882. https://ia800206.us.archive.org/14/items/aestheticmovemen00hamiuoft/aestheticmovemen00hamiuoft_bw.pdf. Accessed 30 Nov. 2020.
- . *Dated Book-plates (Ex libris) with a Treatise on Their Origin and Development*. A. & C. Black, 1895.
- , editor. *Parodies*. 6 vols. Reeves & Turner, 1884-96.
- Lambourne, Lionel. *The Aesthetic Movement*. Phaidon Press, 1996.
- Morris, William. "The Lesser Arts." *Hopes and Fears for Art*. Ellis & White, 1882, pp. 1-37.
- . "Making the Best of It." *Hopes and Fears for Art*, pp. 114-68.
- [Pater, Walter.] "Poems by William Morris." *Westminster Review*, vol. 34, no. 2, October 1868, pp. 311-12.
- Prettejohn, Elizabeth. *Art for Art's Sake: Aestheticism in Victorian Painting*. Yale UP, 2007.
- Ruskin, John. *The Works of John Ruskin*. 39 vols. Ed. E. T. Cook and Alexander Wedderburn. George Allen, 1903-12.
- 川端康雄・井上亜紗・海老名恵・押田昊子・花角聡美「ウォルター・ハミルトン『英国の唯美主義運動』(1882年)試訳と注解(1)」『日本女子大学文学部紀要』第69号、2020年。19-40頁。https://jwu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3254&item_no=1&page_id=4&block_id=101。(2021年7月31日)
- 川端康雄・井上亜紗・海老名恵・押田昊子・花角聡美「ウォルター・ハミルトン『英国の唯美主義運動』(1882年)試訳と注解(2)」『日本女子大学文学部紀要』第70号、2021年。49-63頁。https://jwu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3391&item_no=1&page_id=4&block_id=101。(2021年7月31日)
- 気谷誠「ハミルトンの蔵書票」『ビブリオテカ グラフィカ』<http://bibliotheca-g.jugem.jp/?eid=215>。(2021年7月31日)
- 本間久雄『英国近世唯美主義の研究』東京堂、1934年。

—日本女子大学教授

Summary

The “Cause” of the Aesthetic Movement: Walter Hamilton’s *The Aesthetic Movement in England* (1882)

Yasuo Kawabata

Walter Hamilton’s *The Aesthetic Movement in England*, published in 1882 when the Aesthetic Movement was still ongoing, is a pioneering work on the topic. It is true that there is a kind of snobbism and mediocrity at play in his writing, which has placed the book, it seems, at a lower level than it might have been otherwise. Hamilton acutely grasps, however, the aesthetes’ struggle to synthesize the arts, elucidating their works to the general reader. My paper, which originally constituted a part of a symposium entitled “Art for Art’s Sake/Art for the World’s Sake: Some Types of Open Aestheticism,” held online 18th November 2020, aims to reevaluate the book, contextualizing it in social and cultural conditions. It contains significant quotations from the lectures on art by William Morris, one of which is used as an epigraph: “Have you not heard how it has gone with many a cause before now? First, few men heed it; next, most men condemn it; lastly, all men accept it—and the cause is won.” It is a passage from “Making the Best of It,” one of the five lectures included in a book entitled *Hopes and Fears for Art* (1882). The use of Morris’s texts seems to offer some hint in considering the intriguing aspect of Aestheticism in the late Victorian era which was opening towards, not closed to, society.

